

自己は多面化しているほど心理的に適応しているのか：体制化からの再検討

杜, 健

<https://hdl.handle.net/2324/4495988>

出版情報：Kyushu University, 2021, 博士（心理学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：

氏 名 : 杜 健

論 文 名 : 自己は多面化しているほど心理的に適応しているのか：体制化からの再検討

区 分 : 甲

論 文 内 容 の 要 旨

自己の多面性と心理的適応との間にどのような関係があるのかが論争されてきたが、これまでの実証研究では一致する結果を得ていない。本研究の目的は、自己の多面性に伴い生じる2つの特徴（分化度、体制化度）と心理的適応との関係を明らかにしていくことである。

第一部では、本研究の背景や目的を紹介した。まず、なぜ自己の多面性と心理的適応との関係を検討するのかという背景を紹介した。そして、この問題について、2つの対立する立場をレビューした。その後、それぞれを支持する実証研究をレビューし、これらの研究の不足を分析した。その結果、実際に2つのタイプの人が存在している可能性を提案した。従来の研究においては、自己の多面性に伴い生じた「分化度」の側面のみ注目したため、この2つのタイプの人を分けることができなかった。もし、もう1つの特徴の「体制化度」を考慮に入れると、問題を解決できると提案した。

第二部は、2つの実証研究から構成された。

研究1では、思考の仕方における抽象化する傾向を取り込むことによって、従来の相容れない結果を、より包括的に理解することを試みた。具体的に、質問調査で、自己概念の分化度（SCD）、抽象的思考傾向を表す個人能動性レベル（LPA）、心理的適応を表す主観的幸福感（SWB）との関係を検証した。その結果、従来のSCD研究（Baird et al., 2006; Donahue et al., 1993）の結果を再現した。そして、SWBにおいてLPAとSCDの間に予想した有意な交互作用が見いだされた。LPA低群ではSCDが高いほどSWBが低かったのに対して、LPA高群ではSCDが高いほどSWBが高かった。

研究2では、研究1で得られた交互作用効果をより精緻に説明するために、自己概念の体制化度（SCO）を直接的に測定し、それとLPA、SCD、SWBとの関係を検証した。その結果、研究1の結果を再現した上で、LPAがSCOの媒介によって、SCDとSWBとの関係を調整すること（調整媒介効果）を明らかにした。

研究1、2の結果をまとめると、自己概念の体制化度が高い人にとって、分化するほどより心理的に適応しているが、体制化度が低い人にとって、分化するほどより心理的に適応していないと考えられる。

第三部では、自己の多面性が心理的適応に影響を与えるモデルを提案した。このモデルには3つのプロセスがある。分化するプロセスでは、認知能力や対人関係の複雑性などは、自己概念の分化度を規定する。体制化するプロセスでは、抽象化する傾向が自己概念の体制化度を規定する。分化度と体制化度が一緒に機能するプロセスでは、体制化度は、心理的適応を引き起こすのか、または心理的不適応を引き起こすのかを規定するうえで、分化度はこの効果の強さを規定する。

本研究を通して、自己の多面性と心理的適応との関係について、2つ立場の理論的な主張や従来の実証研究結果の不一致を同じ枠組みでより包括的に理解する1つの糸口を提示した。